

次ページへ続く

Continued on next page...

『梅園奇賞』所収古筆資料の影印・翻刻と解題

伊井春樹
新藤協三

【梅園奇賞】は文政十一年刊の二冊、朱地題簽に「第一集」(二八丁)「第二集」(二四丁)とする。第一集は器物など、第二集は初めに鈴・経巻・太刀等を模刻した後、古筆資料二九点を収める。本稿はその影印・翻刻と解題である。

巻末には、

文政十一年戊子嘉平月摹勒上梓森川世黄 校合

浪華 野梅園蔵板

宇米曾乃

千種利兵衛刀

とする刊記と、その後に「東都書林 雁金屋青山清吉、近江屋吉川半七」の書肆名を記す。これによると、野梅園が編纂した後、森川世黄が校合の手を加えたと知られる。

【梅園奇賞】で注目されるのは、4 後白河帝の「大方広仏華嚴經」、6 後鳥羽帝【新古今集】(水無瀬切)、26 後京極良経公【雲州消息切】の三点がMOA美術館蔵【翰墨城】に、7 後嵯峨帝【御手判切】が京都国立博物館蔵【藻塩草】にそれぞれ見いだせることである。梅園はどのよう

にして古筆家に伝えられていた右の古筆手鑑を目にすることができたのか、またそこからなぜこれら四点だけを抜き出して模刻したのか、その選択の基準など問題になってくる。それに水無瀬切に下絵が描かれているが、依拠したはずの【翰墨城】の断簡にはそのような根拠もないし、現存する他の水無瀬切にも下絵など存在しない。どのような事情があるのか興味深いところだが、これは指摘するにとどめておきたい。

なお、本稿には静嘉堂本を用いた。影印・翻刻を御許可いただいた静嘉堂文庫に御礼を申しあげる次第である。

(担当 解説・1〜20 伊井春樹 21〜29 新藤協三)

奉行

皇年七月廿七日下午諸寺并長谷寺 宣旨

從五位下行左大史兼春宮大屬壬生忌寸望村

遣唐副使從五位上守右少弁兼行式部少輔文章博士讚岐介紀朝臣

長谷雄

中納言兼右近衛大將從三位行春宮大夫藤原朝臣時平

執筆遣唐大使中納言從三位兼行左大弁春宮大夫式部大輔侍從菅原朝臣道真

1 長谷寺緣起跋

奉行 去年七月廿七日下午諸寺并長谷寺 宣旨

從五位下行左大史兼春宮大屬壬生忌寸望村

遣唐副使從五位上守右少弁兼行式部少輔文章博士讚岐介紀朝臣

長谷雄

中納言兼右近衛大將從三位行春宮大夫藤原朝臣時平

執筆遣唐大使中納言從三位兼行左大弁春宮大夫式部大輔侍從菅原朝臣道真

2

嵯峨帝

五十二代諱神野桓武帝第二皇子世稱聖哲殿閣諸門額
承和九年七月崩五十九 此書稱飯室切本書有弘大師嵌注胡粉書

嵯峨帝

五十二代諱神野桓武帝第二皇子世稱聖哲殿閣諸門額
承和九年七月崩五十九 此書稱飯室切本書有弘大師嵌注胡粉書

智有二種一成就有如虛空容受平等无積二成就如
智如輪王受讓頂位此心下法合一切境无學合虛

空皆得自在等合於 如是十因汝當後學 結
輪王結文可知

勸 善男子依五種法菩薩摩訶薩

備 訶薩成就布施波羅密云何為五一者

訶薩成就布施波羅密云何為五一者

白河帝

七十二代眞仁後三宗帝第一皇子在位十四年四十四落飾法諱融觀大治四年崩七十七 白紙泥金書稱蓮華王院切

目連及富樓那從空而來為王說法不可禁
制時阿闍世聞此語已怒其母曰我母是賊
與賊為伴沙門惡人幻或死術今此惡王多
日不死即執利劍欲害其母時有一目名曰
月光聰明多智及與耆婆為王作禮白言大

後白河帝

七十七代眞仁鳥羽帝第四皇子崇德帝弟在位三年四十三落飾法諱行眞建久三年崩六十六 白紙泥金書稱法勝寺切

智光明或見処座初地菩薩所共圍遶此此
丘尼為說法門名一切諸佛大願聚三昧或
見処座二地菩薩所共圍遶此比丘尼為說

後鳥羽帝

八十二代眞成高倉帝第四皇子安徳弟初稱院二十出家法諱良然製和歌又工面延元元年崩於隱岐國六十 此書稱清水切

万乃至一万況復一千一百乃至一千況復
將五四三二一弟子者况復單已乘遠離行
如是等比無量無邊算數譬喻所不能知是

3

白河帝

七十二代眞仁後三宗帝第一皇子在位十四年四十四落飾法諱融觀大治四年崩七十七 白紙泥金書稱蓮華王院切

目連及富樓那從空而來為王說法不可禁
制時阿闍世聞此語已怒其母曰我母是賊
與賊為伴沙門惡人幻或死術令此惡王多
日不死即執利劍欲害其母時有一目名曰
月光聰明多智及與耆婆為王作禮白言大

4

後白河帝

七十七代眞仁鳥羽帝第四皇子崇德帝弟在位三年四十三落飾法諱行眞建久三年崩六十六 白紙泥金書稱法勝寺切

智光明或見処座初地菩薩所共圍遶此此
丘尼為說法門名一切諸佛大願聚三昧或
見処座二地菩薩所共圍遶此比丘尼為說

5

後鳥羽帝

八十二代眞成高倉帝第四皇子安徳弟初稱院二十出家法諱良然製和歌又工面延元元年崩於隱岐國六十 此書稱清水切

万乃至一万況復一千一百乃至一千況復
將五四三二一弟子者况復單已乘遠離行
如是等比無量無邊算數譬喻所不能知是

同 此書稱水無瀬切

いづれにや
春にはこうはひをみ侍とて
東三条院女御におはしけるとき
円融院つねにわたり給けるをき

後嵯峨帝

八十七代藤原仁土御門第二皇子文永五年四月九出家法諱
兼寛同九年崩五十三 此書稱御手判切

毎日轉讀壽命經百卷

件読経者為我現世安穩壽命長遠上人
可始修也

筆者不詳

便生福徳智慧之男設欲求女便生端正有
相之女宿殖徳本衆人愛敬無盡意觀世音
菩薩有如是力若有衆生恭敬礼拜觀世音

6 同 此書稱水無瀬切

つねならぬよによそへてそみる
上東門院よをそむきたまひにける
春にはこうはひをみ侍とて
大貳三位
むめのはななにほふらんみるひとの
いろをもかをもわすれぬるよに
東三条院女御におはしけるとき
円融院つねにわたり給けるをき

7 後嵯峨帝

八十七代藤原仁土御門第二皇子文永五年四月九出家法諱
兼寛同九年崩五十三 此書稱御手判切

毎日転讀壽命經百卷

件読経者為我現世安穩壽命長遠上人
所始修也

8 筆者不詳

便生福徳智慧之男設欲求女便生端正有
相之女宿殖徳本衆人愛敬無尽意觀世音
菩薩有如是力若有衆生恭敬礼拜觀世音

後深草帝

八十八代顯久仁後醍醐帝第五皇子四十八出家法諱素夷
嘉元二年崩六十二

あさ霞ふかく見ゆるや煙たつ
むろのやしまのわたりなるらん
晩霞といふことをよめる
後徳大寺左大臣

後宇多帝

九十一代顯世仁龜山帝第一皇子徳治二年四十一出家法諱金剛性
元亨四年崩五十八

なこのうみの霞のまよりなかむれば
いる日をあらふおきつしら浪
おのことも詩をつくりて
歌にあわせ侍しに水郷春
望といふことを

9

後深草帝

八十八代顯久仁後醍醐帝第五皇子四十八出家法諱素夷
嘉元二年崩六十二

あさ霞ふかく見ゆるや煙たつ
むろのやしまのわたりなるらん
晩霞といふことをよめる

後徳大寺左大臣

なこのうみの霞のまよりなかむれば
いる日をあらふおきつしら浪

おのことも詩をつくりて

歌にあわせ侍しに水郷春

望といふことを

10

後宇多帝

九十一代顯世仁龜山帝第一皇子徳治二年四十一出家法諱金剛性
元亨四年崩五十八

なみのうつせみれはたまそみたれける
ひろは、袖にはかなからめや

返し

壬生忠峯

たもとよりはなれてたまをつゝめとや
これなんそれとうつせみむかし

うめ

よみ人しらす

あなうめにつねなるへくもしらぬかな
こひしかるへきかはにほひつゝ

かにはさくら

つらゆき

同

仲連輕齋
組子牟眷
魏関

11 同

仲連輕齋

組子牟眷

魏関

伏見帝

九十一代輝熙仁後深草帝第二皇子弘安十年二十三踐祚
正和二年四十九出家法諱素融文保元年崩五十三 此書稱筑後

題不知

そらもきり
かに地こさるものせきも
ありといふなり

12 伏見帝

五十一代輝熙仁後深草帝第二皇子弘安十年二十三踐祚
正和二年四十九出家法諱素融文保元年崩五十三 此書稱筑後切

題不知

たうちともたのまさらなむ
身にちかきころものせきも
ありといふなり

13 同 此書稱堀川切

きのものり
よひのまもはかなくみゆるなくむしに
まとひまされるこひもするかな

14 同

復次舍利弗彼国常有種種奇妙
雜色之鳥鵠孔雀鸚鵡舍利迦
陵類伽共命之鳥是諸衆鳥昼夜

15 後伏見帝

九十二代藤原仁伏見帝第一皇子元弘三年四十六落飾法諱
理覺後改行覺延元元年崩於持明院殿四十九

心をおもひもまさりぬけれとはし
めよりちきり給しさまもさすか
にかればなをいともふかう人からの
めてたきなとも世中をしりにし
はしめなれはにやかゝるうき事き
きつけて思うとみ給なむよにはいかて
かあらむいつしかとおもひまとふおや

同 此書稱堀川切

きものり
よひのまもはかなくみゆるなくむしに
まとひまされるこひもするかな

同

復次舍利弗彼国常有種種奇妙
雜色之鳥鵠孔雀鸚鵡舍利迦
陵類伽共命之鳥是諸衆鳥昼夜

後伏見帝

九十二代藤原仁伏見帝第一皇子元弘三年四十六落飾法諱
理覺後改行覺延元元年崩於持明院殿四十九

心をおもひもまさりぬけれとはし
めよりちきり給しさまもさすか
にかればなをいともふかう人からの
めてたきなとも世中をしりにし
はしめなれはにやかゝるうき事き
きつけて思うとみ給なむよにはいかて
かあらむいつしかとおもひまとふおや

後二條帝

九十三代諱邦治後字多帝第一皇子德治三年崩於
二條高倉皇居二十四

草色雪晴初布護鳥声露暖漸線蛩

花山有馬蹄猶露傳野無人路漸滋

保胤

かのをかに草かきまささんみ草にせん
ありつゝも君かきまささんみ草にせん
おほあらしのりしたしたり
あひて駒もすさめすかる人もなし

花園帝

九十四代諱富仁伏見帝第二皇子後伏見帝御養子建武
二年廿九密飾法諱通行貞和四年崩五十二

か候 ひと をし
こよひ きく いられて
かた候 たの候か こゝろ候
あすも 返候
まいらせ ける

16 後二条帝

九十三代諱邦治後字多帝第一皇子德治三年崩於
二条高倉皇居二十四

草色雪晴初布護鳥声露暖漸線蛩

花山有馬蹄猶露傳野無人路漸滋

保胤

かのをかに草かきまささんみ草にせん
ありつゝも君かきまささんみ草にせん
おほあらしのりしたしたり
あひて駒もすさめすかる人もなし

17 花園帝

九十四代諱富仁伏見帝第二皇子後伏見帝御養子建武
二年卅九密飾法諱通行貞和四年崩五十三

さて 心くかしく

か候 ひと をし

こよひ きく いられて

かた候 たの候か こゝろ候

あすも 返候

まいらせ

ける

後醍醐帝

九十五代 尊治 宇多 第二皇子 密出 都幸 於 笠置 寺 曆 應 永 二 年 崩 於 吉 野 行 宮 五 十 一 此 冊 稱 吉 野 切

あはれ
いづれ
のこるつらさは

18 後醍醐帝

九十五代 尊治 宇多 第二皇子 密出 都幸 於 笠置 寺 曆 應 永 二 年 崩 於 吉 野 行 宮 五 十 一 此 冊 稱 吉 野 切

なからふるかい

かへぬ こそなかれ

いのち あふ

の ことに

のこるつらさは

鷹司基忠公 稱小倉切 銘葉也

古今和歌集卷第十六

哀傷哥

いもうとの身まかりける
時よみける
小野のたかむらの朝臣
なく涙あめとふらなむわたりかは
水まさりなはかへりくるかに

19 鷹司基忠公

稱小倉切 銘葉也

古今和歌集卷第十六

哀傷哥

いもうとの身まかりける

時よみける

小野のたかむらの朝臣

なく涙あめとふらなむわたりかは

水まさりなはかへりくるかに

後光嚴帝

九十九代藤原仁光嚴帝第三皇子應長七年崩於柳原仙
居法隆光融壽三十七 仁光初也

いなきことと申給へりぬる十日よひ
のほとよりわらはやみにわつらひ侍をた
ひかさなりてたえかたく侍へれ人の
おしへのまゝにわかにつねいり
侍りつれとかうやうなる人のしるし
あらはさぬときはしたなかるへきも
たゝなるよりはいとをしう思給へつゝ
みてなんいたうしのひ侍つるいまそ
なたにもとのたまへりすなはちそう

藤原行成

右近衛少将養孝長子也長和初至正二位萬壽四年薨五十六老
長書法後世傳行成書法稱世尊寺流所著有新撰年中行事

閑居

不獨記東都履里有閑居泰適之
叟亦令知皇唐大和歲有理世安樂
之音
官車一去樓臺之十二空長隙駟難
追綺羅之千暗老

20 後光嚴帝

九十九代藤原仁光嚴帝第三皇子應安崩於柳原仙
居法隆光融壽三十七

いなきことと申給へりぬる十日よひ
のほとよりわらはやみにわつらひ侍をた
ひかさなりてたえかたく侍へれ人の
おしへのまゝにわかにつねいり
侍りつれとかうやうなる人のしるし
あらはさぬときはしたなかるへきも
たゝなるよりはいとをしう思給へつゝ
みてなんいたうしのひ侍つるいまそ
なたにもとのたまへりすなはちそう

21 藤原行成

右近衛少将養孝長子也長和初至正二位萬壽四年薨五十六老
長書法後世傳行成書法稱世尊寺流所著有新撰年中行事

閑居

不獨記東都履里有閑居泰適之
叟亦令知皇唐大和歲有理世安樂
之音
官車一去樓臺之十二空長隙駟難
追綺羅之千暗老

幽思不窮深巷無人處愁腸欲斷
閑窗有月之時白

鶴籠開處見若子書卷展時逢
故人白

官途自此心長別世事從今口不
言白

蔥帶蘿衣抽簪於北山之闌
檣柱白

檝鼓棹於東海之東江相公

都府(由損)纔看瓦色觀音寺只聽
聲不出門音

陶門跡絕春朝雨燕寢色衰秋夜

相霜關中日月
長以旨

我屋戸未尖地も難きまて荒けり
つれなきひとをまつ(由損)しまに良僧
正

幽思不窮深巷無人處愁腸欲斷
閑窗有月之時白

鶴籠開處見若子書卷展時逢
故人白

官途自此心長別世事從今口不
言白

蔥帶蘿衣抽簪於北山之闌檣柱

檝鼓棹於東海之東江相公

都府(由損)纔看瓦色觀音寺只聽
聲不出門音

陶門跡絕春朝雨燕寢色衰秋夜

相霜關中日月
長以旨

我やとはみちもなきまて荒けり
つれなきひとをまつ(由損)しまに良僧
正

眺望

風翻白浪花千斤 鷹點青天字

出紫闥(虫損)東望山岳半雲根之暗

躋翠嶺而顧家鄉悉沒煙樹之深敬

見天台之高巖四十五尺波白望

長安城之遠樹百千萬莖齋順

筆者不詳

泰山不讓土壤故能成其高河海不

厭細流故能成其深漢書 季斯

巴猿一叫停舟於明月峽之邊胡馬

忽嘶失路於黃沙磧之裏蘇賦 季斯

眺望

風翻白浪花千斤 鷹點青天字

(虫損)

出紫闥(虫損)東望山岳半雲根之暗

躋翠嶺而顧家鄉悉沒煙樹之深敬

見天台之高巖四十五尺波白望

長安城之遠樹百千萬莖齋順

22 筆者不詳

泰山不讓土壤故能成其高河海不

厭細流故能成其深漢書 季斯

巴猿一叫停舟於明月峽之邊胡馬

忽嘶失路於黃沙磧之裏蘇賦 公乘億

23 筆者不詳

しはおりくふるふゆの山さと

冬夜月を 大貳三位

の山葉はなのみなりけりみるひとの

ころにそいるふゆのよのつき

題不和 増基法師

ふゆの夜にいくたひはかりねさめして

ものおもふやとのひましらむらん

障子に雪深あしたにたかゝりし

たる所を 民部卿長家

とやかえりしらふのたかのこひをなみ

雪けのそらにあはせつるかな

鷹狩を 能因

24 藤原公任

関白頼忠長子為人聡敏才兼和漢尤長和歌長久二年薨年七十六撰和漢朗詠集三十六人歌仙又所著有北山抄金玉集等編書

早春

紫塵嫩蕨人拳手碧

玉寒蘆錐脱囊

内宴春暖

筆者不詳

早春
紫塵嫩蕨人拳手碧
玉寒蘆錐脱囊
内宴春暖

藤原公任

関白頼忠長子為人聡敏才兼和漢尤長和歌長久二年薨年七十六撰和漢朗詠集三十六人歌仙又所著有北山抄金玉集等編書

早春

紫塵嫩蕨人拳手碧

玉寒蘆錐脱囊

内宴春暖

氣鬢風梳新柳髮
凍銷波洗舊苔痕

早春即事

新路如今穿宿雪舊
巢為後屬春雲

華山有馬蹄猶露
傳野無人路漸滋
桃李不言春幾暮
煙霞無跡昔誰栖

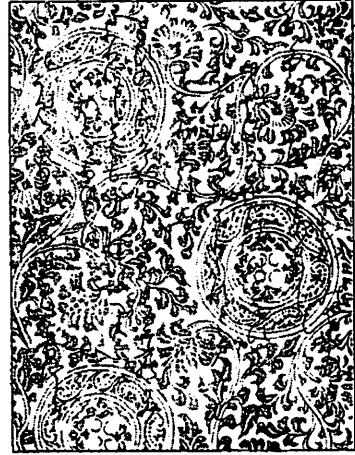
氣鬢風梳新柳髮
凍銷波洗舊苔痕

早春即事

新路如今穿宿雪舊
巢為後屬春雲

華山有馬蹄猶露
傳野無人路漸滋
桃李不言春幾暮
煙霞無跡昔誰栖

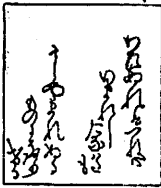
筆者不詳



後京極良經公 雲州消息之切

蒙恩喚扑躍之甚以何比之
但空座右之命若是嘲哢

墨流小色紙



25 筆者不詳

つきやあらぬ春やむかしのはるならぬ
わかみひとつはもとのみにして

みやつかひしけるひとをひさしくまか
らてむかへにまかりたれとゝみにも
てさりければ

(虫損)

よひのまにはやなくさめよいそのかみ
ふりにしとこもうちはらふへく

いせといふひとに

いせのうみにあそふあまともなりにしか

26 後京極良經公 雲州消息之切

蒙恩喚扑躍之甚以何比之

但空座右之命若是嘲哢

27 同 墨流小色紙

わひぬれはつねは

いまれし

たなはたも

うらやまれぬる

ものにそあり

ける

同
假名法華
經之切

壽佛分身の觀世音大勢至三れらるゝ
極樂國土に雲集す空中に側塞して
蓮花座に坐す妙法を演説して昔の
衆生をわたすこの觀をなすをはなつ

同筆

して偈をときていはく
われ過去世の無量無數却をおもへはほとけ
人中の尊といましき日月燈明となつて
たてまつりき世尊法を演説して無量

文政十一年戊子嘉平月摹勒
上梓森川世黄校合

浪華 野梅園藏板

宇米曾乃

千種利兵衛刀

28 同 假名法華經之切

壽佛分身の觀世音大勢至みなことく
極樂國土に雲集す空中に側塞して
蓮花座に坐す妙法を演説して昔の
衆生をわたすこの觀をなすをはなつ

29 同筆

して偈をときていはく
われ過去世の無量數却をおもへはほとけ
人中の尊といましき日月燈明となつて
たてまつりき世尊法を演説して無量

文政十一年戊子嘉平月摹勒
上梓森川世黄校合

浪華 野梅園藏板

宇米曾乃

千種利兵衛刀

1 長谷寺縁起跋

長谷寺に蔵される縁起の跋文の部分の模刻したもの。道真の筆跡と伝える。なお、『集古浪華帖第三』に、「菅原道真公書」として「長谷寺縁起文」が収められるが、ここに示されるのはその巻末である。

2 嵯峨帝

金光明最勝王經注釈 卷四

『新撰古筆名葉集』に「飯室切 香紙、墨字經、所々弘法大師胡粉ニテ加筆アリ」と見える。飯室切には、この注釈切と、『勝鬘經』を書写した断簡の二種が存し、書体を異にする。いずれも白点が付される。

3 白河帝

仏説觀無量壽經

『新撰古筆名葉集』には「蓮華王院切 同(白紙) 金字經、銀野ノ上下ニ金銀蝶鳥ノ下画アリ、黒点ハ後人ノ書入ナリ」とする。切名称は、白河天皇の御願寺蓮華王院(三十三間堂)に伝えられたことによるのであろうか。「蓮華切」とも称す。

4 後白河帝

大方広仏華嚴經

『新撰古筆名葉集』に「法勝寺切 白紙、金字經、金野上下子持スジ」とする。この切は、『翰墨城』に押されたものと一致する。『翰墨城』は

古筆家了仲(一六五六—一七三六)の所伝とされるので、『梅園奇賞』の編者は、そこから抜き出して模刻したのであろう。

5 後鳥羽帝

法華經 從地涌出第十五

『新撰古筆名葉集』に「清水切 白紙、墨字經、銀野一行毎ニ銀泥ニテ上ニ天蓋、下ニ蓮座アリ」とする。ただし、偈頌の部分は、一句ごとに銀泥で天蓋と蓮台を描く。『翰墨城』「藻塩草」などに、同種の清水切が押される。

6 後鳥羽帝

新古今集 卷十六 雜上 (一四四五) — (一四四七詞書)

『新撰古筆名葉集』に「水無瀬切 四半、新古今、哥二行書、又大同小異ノキレアリ、名物ニアラス」とする。本断簡は「翰墨城」に押された一葉とまったく一致するものの、ただこれには下絵がない。水無瀬切は「藻塩草」【見ぬ世の友】「文彩帖」など比較的多いが、いずれも下絵はないし、『古筆名葉集』にもそのような指摘は見いだせない。すると、『翰墨城』を模刻するにあたって、本断簡には恣意に下絵を加えたのであろうか。

7 後嵯峨帝

願文

未詳

【新撰古筆名葉集】に「御手判切 願文、字ノ上ニ朱ニテ御手ノ形アリ」とする。本断簡は、【藻塩草】所収切を模刻したもの。御手判切の名称は右に記すように、朱によつて手形の捺されているのに由来する。【藻塩草】は筆で描いたのだが、ただそれを模刻しながらここでは省略している。

8 筆者不詳

法華経 観世音菩薩普門品第二十五

9 後深草帝

新古今集 卷一 春上 三四—(三六詞書)

後深草院については、【新撰古筆名葉集】に常盤切とする仮名書状を見ただけである。現存するものほとんどがその書状で、それ以外には知られない。

10 後宇多帝

古今集 卷十 物名 四二四—(四二七詞書)

後宇多院筆とする古今集は、『つちくれ』に卷二十の一葉が収められており、松木切と称している。ただそれは一首一行書きで本断簡と異なるし、また【翰墨城】や【藻塩草】に押される松木切は兼行集である。

11 後宇多帝

12 伏見帝

後撰集 卷十六 雜二 一一六〇

【新撰古筆名葉集】に「筑後切 雲紙、巻物、後撰、拾遺ノ哥、三行或ハチラシ、金銀砂子紙モアリ」とするが、後撰集・拾遺集のほかに古今集の筑後切も存する。後撰集卷二十の一卷を伝える菅田八幡宮本の巻末には「永仁二年十一月五日書訖」とあるので、伏見天皇三十歳の書写と知られる。

13 伏見帝

古今集 卷十二 恋二 五六一

【新撰古筆名葉集】に「巻物切 古今哥、二行書、佐理卿ウツシ」とするものが、これに相当する。佐理筆の古今集を、伏見天皇が模写した伝本という。堀川切の名称は、『見ぬ世の友』に付されて以来用いられるが、由来は不明。なお本断簡は、【翰墨城】に押された一葉を模刻したものである。

14 伏見帝

出典未詳

15 後伏見帝

源氏物語 浮舟巻

【新撰古筆名葉集】に「四半 源氏、朱書入点アリ」「六半 源氏」とするのを見いだす。近衛家伝来の「大手鑑」には升形本の若紫巻十行の一葉が押されるが、これは右の指摘の六半切であろうか。本断簡は升形本ではないが、筆跡など「大手鑑」の切と近似する。あるいは数行分裁断されているのかも知れない。

16 後二条帝

和漢朗詠集 巻下 草 四三八―四四一

【新撰古筆名葉集】に「巻物切 朗詠、上下二墨野」とするが、後二条天皇筆とする和漢朗詠集の断簡はこれまでまだ目にしていない。本断簡がそれに相当するかどうか、模刻だけに界野の有無も不明である。

17 花園帝

仮名書状

【新撰古筆名葉集】に「萩原切 真名、カ名、杉原紙、消息、経ウラモアリ」とするのが、本断簡に相当するであろうか。萩原切は、【翰墨城】「見ぬ世の友」「藻塩草」にも押される。

18 後醍醐帝

歌集

【新撰古筆名葉集】に「吉野切 中四半形、哥恋述懐、御自詠、古哥

交り一首、チラシ書」とする。現存する吉野切は、いずれもこのように散らし書きで一首を書くが、後醍醐天皇の自詠歌集かどうかは不明。

19 鷹司基忠公

古今集 巻十六 哀傷 八二九

【新撰古筆名葉集】に「小倉切 四半、雲紙、古今、続後撰、哥二行書、弟子極二家基公トアリ、誤ナリ」とする。小倉切には古今集と続後撰集があった由だが、後者は今のところその例を知らない。小倉切は、【翰墨城】「藻塩草」などにも押される。

20 後光厳帝

源氏物語 若紫巻

後光厳天皇の源氏物語については、【新撰古筆名葉集】に「同（四半）雲紙、白紙、源氏又は歌合詞書等類切多シ」とする。類切が多かったようで、白鶴美術館の「手鑑」にはそれぞれ筆跡の異なった二葉が押されるが、本断簡ともまた別である。ただ、【翰墨城】の若菜上巻物と【藻塩草】（河野文化館）の横笛巻切とは同筆のつれと思われる。

21 藤原行成

和漢朗詠集 巻下 閑居（六一三―六一六、六一八―六一〇、六二二―六二三）、眺望（六二四―六二六）

【新撰古筆名葉集】には、行成筆朗詠集について「法輪寺切 巻物朗

詠、浅黄紙キラ砂子、飛雲アリ」、「安宅切 朗詠巻物、金銀下画、歌二行書」、「巻物切 朗詠、墨野銀砂子、少片カナ反り点アリ」等の記載があるが、いずれも本断簡の原拠とは認め難く、結局のところ不詳。「閑居」(613~626)のうちの617・621の二句を欠いているが、その理由についても未詳。

22 筆者不詳

和漢朗詠集 巻下 山水(四九九・五〇〇)
現存する多くの朗詠集の切の中で、本断簡とまったく一致するものは見出し得ず、目下のところ原拠についても未詳。

23 筆者不詳

後拾遺集 巻六 冬 三九〇(下句)―三九四(詞書・作者)
模刻の際の原拠については未勘であるが、本断簡の本文を流布本のそれと比較すると、

冬夜月を↓冬のよの月をよめる、(391)

雪深あしたたかくりしたる所を↓雪のあしたたかくりしたる所を誦侍ける、(393)

鷹狩を↓鷹狩をよめる、(394)

の如く異同を示すので、流布本系本文とは別の本文であったことが知られる。

24 藤原公任

和漢朗詠集 巻上 早春(二二・一三)、鶯(七〇)、巻下 草(四三九)、仙家(五四八)

公任筆と伝承する朗詠集の切は、大内切・太田切・唐紙朗詠集切等をはじめ数多く伝存するが、本断簡と一致するものは見出し得ない。本断簡が一二、一三、七〇、四三九、五四八の如く飛び飛びに抄出されていること、また、通行の朗詠集本文と比べた場合、「内宴春暖」(13)、「早春即事」(70)の題を有し、各句の作者注記「野」「篁」「都(良香)」「菅(道真)」「保胤」「江(朝綱)」を欠くこと等になお問題を残すが、未勘。

25 筆者不詳

業平集(西本願寺本系統) 一七(歌)―一九(上句)

「まつかげ」二〇の藤原公任筆尾形切(「月影帖」中―)では行成筆とする)とまったく一致するので、尾形切の模刻である。ただ、本断簡が丸唐草下絵であるのに対して、尾形切は「新撰古筆名葉集」に「尾形切四半、歌仙家集、胡粉地雀鳥虫草水藻ノ下画アリ」とある如く下絵が異なる。あるいは、模刻の際に恣意に下絵を変えたのであろうか。

26 後京極良経

雲州消息(明衡往来) 巻上^末 第三四

本断簡は「翰墨城」六五「巻物切」の模刻である。「翰墨城」では「巻物切」と記すのみであるが、本断簡に「雲州消息之切」とあるように、

模刻の際の原拠の切については未勘。

内容は雪州消息の一部分である。「新撰古筆名葉集」に「巻物切 雪州消息、紙五色金銀下画アリ」とあるのに該当しようか。小松茂美氏は、「翰墨城」の解説で、これを「本朝文粹」の如きものからの抄出かとされ、恩暖を蒙り、扑躍の甚しき、何を以てかこれに比せん。但だ座右の命と定め、是の若きの嘲哢…と訓じられるが、翻刻した如く、「蒙恩喚」「空座右之命」であろう。

27 後京極良経

拾遺集 卷十二 恋（七七三）

「新撰古筆名葉集」には「小色紙 歌チラシ書」とあるが、本断簡に該当せず、模刻の原拠については未詳。この歌は「拾遺抄」（巻七、恋二、二八四）にも存し、流布本「集」「抄」が共に第二句を「ゆゝしき」とするのに対して、本断簡は「いまれし」とする点が異なる。

28 後京極良経

仮名法華経（？）

本断簡は「仮名法華経之切」とするが、「法華経」にこの本文は見出し得ない。結局のところ未勘であるが、「新撰古筆名葉集」に「経切 墨野墨字朱墨星アリ」とするのにあるいは該当するか。

29 後京極良経

妙法蓮華経 序品第一